



みずみどり

2022年 6月1日 第150号

発行：いたばし水と緑の会事務局

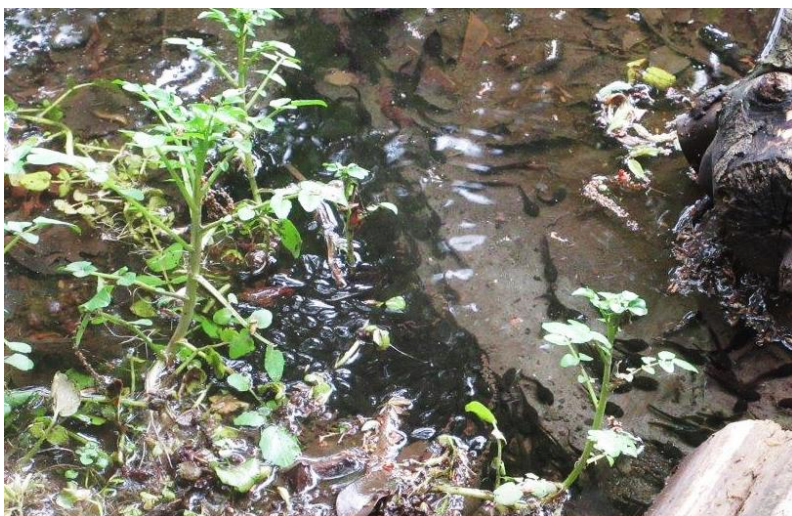
年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会
<http://mizumidori2.eco.coocan.jp>E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 090-1423-9894

トンボ池のカエルの卵はどうなったか

赤塚トンボ池では、卵が6つもありました。ところが、オタマジャクシは卵塊1つ分くらい。他の卵は消失。フェンスで囲まれた池です。以前ならカルガモが卵を食べた、と断言したかもしれませんが、今年は、カルガモはほとんど来なかったので、疑問が湧きます。

孵ったオタマジャクシは元気に泳いでいましたが（写真右）、4月25日、全部いなくなりました。



オタマジャクシ22年の旅立ち

2022年3月11日、トンボ池にヒキガエルが産卵にやって来た。午前中に見に行くと7~8匹のカエルを見ることが出来た。コロナの影響で、今年も梅まつりもなく、ひっそりと産卵が始まっていた。この時期に、産卵を楽しみに見に来る人がいることがわかって、うれしくなった。そして、13日に卵塊を2メートル位、水槽に入れて私の家に持ち帰った。洗面器に移し替えて、観察が始まった。メダカも飼育しているので、メダカ用の餌を与えることにした。

今回で、3回目なので、自信?を持って飼育を始めた。

約1週間で卵塊の管状から卵がつながったまま、独立してきた。10日過ぎて丸い卵が、ややひし形ぽくなって、やがてオタマジャクシらしく尻尾がのびだしてきた。初めは、タチウオ状の体型から、音符状のいつも見る体型になった。これが2週間目だ。それからは、水槽の淵に、口でつかまりながら餌を食べたりしている。

1ヶ月半（5月初め）経った頃から後ろ足が伸び始めた、はじめのうちは、たんなる付属物のような、動きもなく、神経が通っていない感じがした。1週間で、使えるようになりました。2ヶ月目に手がのびてきた、体の両脇が、かくばってきたと思ったらそれが手となった。結構、すばしっこい動きをするけれど、カルガモにとっては、おちやのこさいさいに取れる餌であろう。

5月19日、家で大きくなった、おたまがえるを、トンボ池に戻す日となった。

両手両足が出て、まだ尻尾も残った状態で、25匹、後ろ足だけで、間もなく手が出る状態のものが5匹、以上併せて30匹を池に戻した。

自然の中に戻った、おたまがえるは、まだ、1週間位は、トンボ池で生活をしないとイケないのですが、陸に上がるまでの生活と上がってからの生存競争を如何に克服するのであるだろうか？

ハラハラドキドキの冒険の始まりですが、あとは自分の運命に任せるしかない、我々は静かに見守ることしか出来ません。再びこのトンボ池に戻ってくることを期待しながら・・・

追記 持ち帰った卵塊に、150個程度の卵が着いていました。

40匹程度を、メダカの水槽に入れ、あとは、洗面器の中で、飼育していたのですが、水質の悪化か、餌不足にて、大量死を招いてしまったと、考えています（山田元一郎）。

トンボ池のオタマジャクシの一部を非常時に備えてコンテナ（底に小さな孔を空けた）に入れてネットで覆って保護しました（4月7日）。

1ヶ月後、コンテナの底に、粉が散らばっているのは、オタマジャクシの糞らしい。ミジンコより小さいプランクトン？が漂っていて、オタマジャクシが食べています。コンテナの中の水は透明です。外の池の水面には黄土色の油膜がでて水は濁っているのに。なるほど。そーなんだ。コンテナの中はほぼ閉鎖された世界ですが、水の汚れを食べるプランクトン？がいて、オタマジャクシがそれを食べて、安定した世界になっているように見えました。コンテナの底には赤い小さな幼虫（ユスリカ？）もいました。



15日、ほとんどがまだオタマジャクシなのに、数匹が早々と貧弱なカエルになっていました。ザリガニの死骸やイモムシなどを与えましたが、エサが足りなかったのか、食いつぶくれたオタマジャクシが、未熟児子ガエルになったのか。オタマジャクシもカエルになるには早すぎるのですが、5月22日、フェンス際の池に放しました（50匹くらい）。未熟児（次頁写真）は15匹程）は、死んで仲間に食べられるか、外に出ても生きられないでしょう。

カエルになる前にオタマジャクシを放してしまった
オタマジャクシは尾を左右に振って横バタフライで上手に泳ぎますが、手足が生えたと、カエル

泳ぎになり、水の中の行動はオタマジャクシより劣ります。この時期に水の中でエサをとりながら陸と水の間の生活に慣れて上陸するのでしょうか。子ガエルになるまでコンテナや水槽で育てると、この移行（上陸）は、清水の舞台から飛び降りるようなものかもしれません。山田さんが手足の出たオタマジャクシを池に返したのはよい判断だったと思います。しかし、池にカエルガモはいなかったのに、山田さんのオタマジャクシも、コンテナのオタマジャクシも翌日には、視界から消えました。流出しないように下流側にネットを張っていたのに。カエルになるには早いのに。どこへ行ったのか。ここにはザリガニ、トカゲ、ヘビ等他の生き物も住んでいます。生き残れるといいのですが・・



都会でヒキガエルが繁殖し、生きていくのはむずかしいことです。トンボ池での課題は、まずカエルガモ、ザリガニ対策、みんなの愛情。保護飼育をどうするかも反省して考えないと。

他の池のカエルの卵はどうなったか

徳丸緑地の池では、オタマジャクシは見当たりません。子ども達がカエルをつかまえて遊んでいたし、岸边にあった卵がなくなったし、オタマジャクシは絶望的という先入観がありました。やはり見当たりませんでした。が、どこかで生き延びたかもしれません。

沖山の池は、雨が少ない冬に干上がって、カエルが産卵に来なかったり、折角産んだ卵が干上がるという、どこかの国の砂漠のような悪条件の池です。それでもカエルたちは他の場所に行かずここに来て産卵します。3月やっと降った雨の翌日カエルたちは集まり、3月25日には、大量の卵が池の底いっぱい重なって生み付けられていました。その後、池水は干上がる一方で、少々の雨では効果なく干上がり続け、3月31日には干上がって卵は全滅したかに見えました。が、不和さんが5月初めにオタマジャクシが2、3匹泳いでいたという。その後のオタマジャクシは確認していません。

成増の高木さんから電話。小さな池にカエルたちが来ていた、子ども達がカエルを捕まえて遊んでいた、その後、カエルはいなくなり、池には卵もオタマジャクシもない、と言います。子ども達が卵を捕っていったのだろうと私は思いました。そうすると彼女は「えーっ」と絶句。子ども達に見つかったカエルたちの運命を思うと切ないです。

昔も子供たちがオタマジャクシをとってきたり、どこかに放したりしても、まわりに自然があれば、オタマジャクシも生きていけたと思います。カエルたちを取り巻く環境が、まったく違ってしまった今、カエルたちをオモチャにしないでそっとしておいてほしいですね。

「オタマジャクシはどうしていますか」と立ち寄って下さる方も少なくありません。オタマジャクシを身近な自然として見守っていきたいと思います。

アリの観察会 外野でそっと見学

12月2日、ため池公園の梅林の下で、一人がしゃがみ込んで地面を覗き込み、もう一人がカメラを構えて撮影していました。寒いのに何をしているのかしらと近づくと・・・環境省のオンラインによるアリの観察会の撮影中で、おじゃまにならないようにそばで見学させていただきました。



アリは冬でも活動しているのですね。

ここで採取したのは、クロナガアリ。タンポポやイネ科植物の種子を主食にするので、種が落ちる

秋～冬に活発に行動するそうです。地面深く（4m近いものもある）穴を掘り、種子を溜め込みます。アリとキリギリスに出てくるアリは、クロナガアリかも。他のアリは冬眠前に食料を貯めることはないそうです。

ため池公園では、梅林の下、砂場の縁、梅の木の幹の隙間など。アリのいそうな場所を丁寧に探します。

城址の山に登ったところで、草地でアリを探します。都会では空地がなくなってアリが減っていますが、城址には40種類位いるそうです。ひとしきり草地のアリを探してから南側のフェンス際の落ち葉が溜ったところでアリを探します。吹きだまりにたまった枯れ葉に混じった腐った枝、朽ちたドングリを割って調べます。

アリ調査に使われた道具は、ルーペ、ヘッドライト、吸虫管、スコップ（移植ごて）、ザル（ふるい）、バットなど。枯れ葉や腐った葉などが混じった土をザルで篩います。土にはトビムシなどの土壤生物があるので、肉食性のアリがいます。

先生がハリアリを見つけました。ハリアリはシロアリを食べるアリで、毒針をもっています。

アリには女王アリがいて（いない種もある）、働きアリ（メス）がいて、集団生活をします。形もハチと同じように頭、胸、腹の間がくびれており、ハチに近い種だそうです。なるほどそうですね。

1家族が集団で暮し、働きアリはメスだけ。5月頃、高温多湿の風の弱い日、羽の生えたメス（新女王アリ）と羽の生えたオスが巣から飛び立ち、他の家族から飛び立ったオスとメスと交尾する「結婚飛行」をします。ロマンチック！結婚飛行の時期はアリの種類によっていろいろですが、あちこちの巣から示し合せたよう一斉に飛び立つそうです。こうして、近親交配を避けるのですね。オスは交尾したら（しなくても）死んでしまい、メスは単独で巣を作り、あとの人生はひたすら卵を産み続けます。長生きらしいです。アリの人生もすごいですね。

私たちはバッタ広場でアブラムシのそばにいるアリを見かけます。アリは、アブラムシのお尻から出す甘露をもらい、アブラムシの天敵であるテントウムシを追い払ってくれます。これを「共生という」と学校で習いました（次頁写真左）。



もう一つ、アリと植物の「持ちつ持たれつ」の関係として、スミレなどの植物が種にアリが好むおいしいものを付けていて（エライオソーム）、アリが巣に持ち込み、おいしいところだけ食べて種を巣の外に出し、結果的に植物はアリに種を散布してもらうのです。道路の縁石の隙間や、石垣の目地にスミレが咲いているのを不思議に思ったのですが、スミレの作戦だったのです（写真右）。



同じようにムラサキケマンも咲いていました。アリに運んでもらったのでしょ。

さて、アリの観察、やってみようと思っていたら、さっそくその機会がありました。

バッタ広場の壊れた看板を取り外したら、板の裏がアリさんの巣になっていました。女王アリはいませんでした。ルーペで観察するとお尻が丸い。腐った板の下にいたこと

からアミメアリと断定しました。

アリの名前がわかってちょっとうれしかったです（坂本郁子）。

環境省の「こどもエコクラブ」に、このアリの撮影画像と先生の講演が出ています。

「アリがいなくなったら、僕たちの生活で変わることはありますか」という質問に対して、先生は、地球上でアリがいなくなったら、生態系はものすごく変わると思います。身近でアリがたくさん暮せる環境を残すのがとても大事なことだと思っています、と話されていました。

カマキリが減ったのでは??

バッタ広場の手入れをしていて感じたことは「カマキリが減った」ことです。8月末の夏の親子の観察会では、カマキリが見つからないのではと心配でした。みんなで探して、オオカマキリ、ハラビロカマキリ、コカマキリがそれぞれ1匹ずつですが見つかってほっとしました。ありふれた生き物を大事にするバッタ広場に以前はいっぱいいたのです。カマキリが見られなくなるのではないかと、という危機感があります。おおげさでしょうか。

秋遅く、木の枝やササやセイタカアワダチソウなどの丈の高い草にカマキリが卵を産み付けます。バッタ広場の手入れで、ササの上の方や木の枝に生み付けられた卵をうっかり切ってしまうかねないので、目印のリボンを付けておきました。ところがリボンを付けた卵がなくなったり、野鳥にかじられたりして、「リボンを目印に野鳥が食べに来るのでは?」という心配ができました。野鳥も学習して食べるのでしょうか??まさかと思いますが。バッタ広場に遊びに来る人達にとって、ここは虫取りの場所。掲示板に「虫を捕らないでね」と書いても、生き物を守ろうというメッセージは伝わりません。遊びに来た人がリボンに気づいて卵を見つけて取っていったようです。私たちにできる対策として、いつも冬に木の枝を切り詰めるのですが、カマキリ卵保護のため、5月以降にしました。鳥にも人間にも見つかりにくくなります。

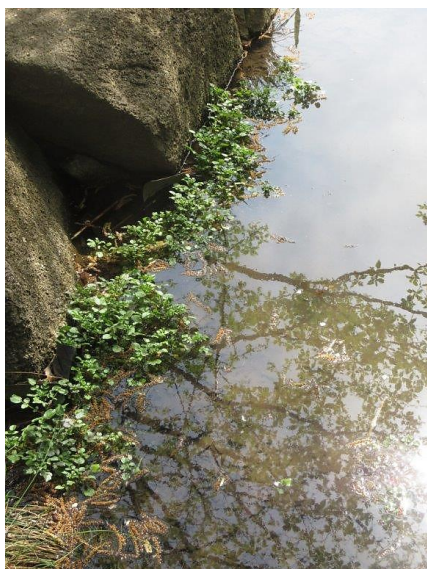
4月10日、みんなでカマキリの卵を調べました。

オオカマキリ (完全なもの)	7個
ハラビロカマキリ (完全なもの)	5個
オオカマキリ (食べられたもの)	10個
ハラビロカマキリ (食べられたもの)	4個

これ以外に、持ち去られた卵がいっぱいあります。

4月17日、1週間前には完全だった卵が2つ野鳥にかじられていました(写真右)。探せば他にもあるでしょう。幼体が出てきて穴が開いた卵もありました(写真右下)。ハラビロカマキリの卵は、硬めで色も黒っぽく、まだまだ卵のままです(写真左下)。バッタ広場ではハラビロカマキリの幼虫が多かったように思います。5月に入って葉が茂り、卵を見つけるのがむずかしくなりました。忘れてしまった頃に、小さなカマキリに出会えるのを楽しみにしましょう。





観察記録

(2022年3月25日~5月22日)

トンボ池 クレソンを植える (写真左)。

ザリガニ多、オタマジャクシ、カナヘビ、トカゲ多、アカボシゴマダラ幼、アカシジミ、アカボシゴマダラ、イチモンジセセリ、シマサシガメ幼、オオクロカメムシ、ワカバグモ、キアシドクガ、カルガモ飛来ほとんどなし、子ガエル、モズ、オタマジャクシ池に放す

タコノアシ、イ、アゼナルコスゲ?

バッタ広場 カマキリの卵調査、キンミズヒキ抜き取り、キチョウ、アゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、アカボシゴマダラ幼虫、コムスジ、テングチョウ、ベニシジミ、クビキリギリ

ス、ツチイナゴ、カマキリ孵化、ツチイナゴ交尾、ナナホシテントウ、ナミテントウ、ナナホシテントウ交尾、テントウムシ幼虫、カメノコテントウ、カメノコテントウ幼、ヨコヅナサシガメ、オジロアシナガゾウムシ脱出跡、キバネホソコメツキ(?)、アオドウガネ?(小)、コアオハナムグリ、マルカメムシ、アカサシガメ、ゴミグモ、コガタコガネグモ、ヤツボシハムシ、アミメアリ、城址斜面にギンラン咲く、



左上：シオカラトンボ、オスもメスも同じ色で早すぎる?交尾 (4月28日)

右上 オジロアシナガゾウムシが脱出したクズの茎の跡 (成虫は見かけなかったのですが、生きていたようです)

左下：クモの子ども (4月18日)

活動のお知らせ

活動の問い合わせ等は事務局 瀬田 090-1423-9894
坂本 090-4618-1295

1 赤塚城址自然観察と手入れ（第2日曜日）（どなたでも参加できます）

赤塚城址周辺は自然が豊かなところ。コロナ禍でもできること・・・生き物達の環境を守る活動を体験しませんか。草や土に触って自然を感じてね。生きものは観察したら自然に戻します。ササ刈り等の作業もやります（カマは用意します）。

（注意）別の公園に観察に出かけることもあるので、前もってご連絡ください。

6月12日（日） 10:00～11:30

7月10日（日） 10:00～11:30

集合場所：板橋美術館そばの赤塚トンボ池前

参加費：無料（保険には加入していません）

もってくるもの：汚れてもよい靴と服装で、軍手、あれば図鑑、虫眼鏡など、

2 赤塚ビオトープ（赤塚トンボ池、バッタ広場）の手入れ（第4土曜日）

6月25日（土） 10:00～11:30

集合場所：板橋美術館そばの赤塚トンボ池前

雨天の場合は中止（または翌日） 問い合わせは：事務局まで

汚れてもよい靴と服装で。軍手（作業手袋）、

3 夏休みボランティア体験の受け入れ

7月23日（土） 10:00～11:30

ボランティアセンター主催「ボランティア体験」の一環として、昆虫調べに参加される親子と一緒に生き物調査をします。

日暮台公園と樹林地の観察 日暮台公園前集合

6月5日（土） 10:00～11:30

7月3日（日） 10:00～11:30

8月7日（日） 10:00～11:30

●ビオトープボランティア大歓迎

いたばし水と緑の会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、ビオトープ（赤塚トンボ池と赤塚公園バッタ広場）などの観察と手入れ作業、日暮台公園自然樹林地の定点調査などを行っています。観察と手入れを通して、季節の変化や新しい発見があって楽しいですよ。ホームページ <http://mizumidori2.eco.coocan.jp>

●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）をお送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。

●身近な自然情報やご意見などをお寄せ下さい。